

キリスト教学研究室紀要

第3号 2015年3月 99~106頁

Yearbook で見えるキルケゴール研究の動向

谷塚巖

1. はじめに

本報告書は、デンマークのセーレン・キルケゴール研究センターが1996年から毎年発行している *Kierkegaard Studies: Yearbook* を手掛かりにして、キルケゴール研究が、デンマークを中心にしてどのようになされてきたのかについて概観することを目的とする¹。研究状況の流れをごく大まかに把握することが当面の目的であるため、個々の研究分野やその中での代表的研究、あるいは方法論の詳細にまで踏み込むものではない。この点については、先行研究調査の引き続きの課題としたい。

研究センターが、*Yearbook* とは別のシリーズとして発行している *Monograph Series 1: Kierkegaard Revisited* の序文においては、1996年に開催された学会を総評するにあたって、それまでなされてきた研究のあり方を再考する見解が述べられている。以下にその一部を引用するが、これによって、キルケゴール研究がどのような状況のもとになされていたのかを知ることができるだろう。

これまでの世代のキルケゴール研究の多くは、キルケゴールのテキストの内在的読解をドグマ的に要求してきた。その一方で、今学会で発表された論文のいくつかは、キルケゴールの諸著作を、異なったコンテキストに、より厳密に言えば、外部のコンテキストに置くことによって、それらが多様性に富んだ豊かなものであることを証明した。同様に、過去においては、アポロギア的な論調、あるいはそれどころか英雄崇拜的な論調がしばしば見られ、それがある意味ではキルケゴール正統主義、またはドグマをもたらした。一方で今学会では、キルケゴールの思想におけるいくつかのポイントに対する、高度な批判的評価も見られ、それが以前には困難であった、差異化されたバランスのとれた像を可能にした。こうして今学会では・・・開放的な受容的な雰囲気醸成され、そのことによって、将来のキルケゴール研究における、何らかの広大な可能性を証明することに役割を果たした。²

ここに示されているように、デンマークでは90年代半ば頃よりキルケゴール研究のあり方の見直し

がはじまり、それを転換期として、より幅の広い新たなキルケゴール研究の可能性が模索されるようになった。研究センターはいわばその中心に位置し、そしてその活動の成果の一部が *Yearbook*、並びに *Monograph Series* で公表されているのである。これらの出版物は、研究センターにおける各年の最新の研究成果を知ることのできる媒体でもあり、デンマークを中心とするキルケゴール研究の動向を確認するためには、これらを概観しておくことが必要である。本報告書では、研究動向を概括的に把握することのできるこの *Yearbook* に焦点を合わせることにしたい。

2. *Yearbook* の構成

Yearbook は 1996 年から刊行がはじまり、2010 年までを一つの区切りとして、その後も刊行が続いている。この区切りを境にして、前期と現在にいたるその後とに分けるとすれば、前期の *Yearbook* は、後述する研究センターの諸活動と密接に結びついた内容によって構成されている。一方で現行においては、前期にはなかった公募による論文の掲載が開始され、それによって、査読付きのキルケゴール専門誌としての体裁を有する出版物に変わっている。

Yearbook はセンターの研究活動の内容を、他の研究者とも共有することを目的として刊行された³。創刊号の序文によれば、構成は大きく四つに分けられる。①センターが中心となって、年次開催される研究セミナーに提出された論文、②センターと関係の近い研究者らによる論文、(および 1999 年号からはキルケゴールの著作の世界各国における受容史研究)、③センターによって刊行が進められた批評版全集 (*Søren Kierkegaards Skrifter*—この全集は *SKS* と表記することが慣例となっている。なお注釈書は、*SKS K* と表記される—) に関連する文献学の論文、そして、④センターのニューズレターで構成される。*Yearbook* に掲載される論文の数は毎年二十数本にまでのぼり、500 頁前後の大著な出版物となっている。

研究動向を確認するためには、①と②が中心となるが、センターにおける活動は、最先端の文献学的成果を取り入れた、批評版全集の刊行(1997-2013)という重要な事業も担っていた。批評版全集は、これからのキルケゴール研究を支える、きわめて重要な基盤となっており、その意味では文献学に関連する③を占める論文の重要性も看過することはできない。

前期における *Yearbook* の構成は以上の通りであるが、2011 年からは若干の変更が見られる。収録論文は、大きくは次のような分野に従って分けられている。①典拠的研究、②概念分析、③歴史的コンテキストの研究、④受容史研究など。なお *Yearbook* に収録されている論文は英語、ドイツ語によるものが大半を占めているが、デンマーク語によるものに加えて、フランス語による論文も収録されている。これは各言語におけるキルケゴール研究の伝統を総合して議論を活発化させ、さらなる研究の進

展を図るという試みの下になされている。

3. 研究動向

Yearbook を通して確認できる研究の動向として、まず確認すべきは、センターが年次開催している研究セミナーにおいて、どのような研究テーマが設定されてきたのかという①を占める部分である。前期における各年の Yearbook の研究テーマを見ると、キルケゴールのある特定の著作が選ばれていることが分かる。テーマとして選択された著作は以下の表の通りである。

Yearbook	テーマ
1996	『死に至る病』(1849)第1部
1997	『死に至る病』(1849)第2部
1998	『愛の業』(1847)
1999	『文学評論』(1846)
2000	『建德的講話』(1843-44)、『想像された機会での三つの建德的講話』(1845)
2001	『不安の概念』(1844)
2002	『反復』(1843)、『おそれとおののき』(1843)
2003	日誌・備忘録
2004	『哲学的断片』(1844)
2005	『あとがき』(1846)
2006	『意志に反して出版されたなお生ける者の遺稿から』(1838)
2007	『さまざまな精神における建德的講話』(1847)、『キリスト教講話』(1848)
2008	『あれか・これか』(1843)
2009	『イロニーの概念』(1841)
2010	(研究セミナーなし)

セミナーのテーマの中心として設定されているのは、キルケゴールの個々の著作、あるいは日誌・備忘録である。その選択にあたって特徴的なのは、キルケゴールの主著に、もちろん注目する一方で、これまでの研究で、キルケゴールの著作としては一般的に重視されてこなかったテキストにも注意が払われていることである。著作としては、とくに『愛の業』や『文学評論』、1843～44年にかけての『建德的講話』、また、日誌・備忘録などが選ばれている。この選び方からは、キルケゴールの思想を、

キルケゴールの意図に即しつつ、その全体から解釈するという方法が採られていることが分かる。同時に、これらの著作にも目を向けることの必要性を内外の研究者に示していると言えるだろう。またこういった著作のほかにも、キルケゴールの日誌や備忘録が、それらが収められた巻の出版を機に、研究テーマとして設定されている。こういった、研究史においてあまり注目されてこなかった諸テキストにあえて目を向けるということは、これまでのキルケゴール研究のあり方への再考の裏返しと言える。つまり、キルケゴールの思想はその著作の全体から解明していかなければならないということである。キルケゴールは、実に多様な分野にまたがって書き残しており、それだけに、著作を選択する際の恣意性は免れない。キルケゴールの思想研究における方法論の重要性は、こういったところからも認めることができるだろう。

キルケゴールのテキストのその多様性から、研究分野についても、さまざまな方面からの研究の可能性が存在している。実存的にテキストを読み解いていくという伝統的な方法論に加えて、1990年代後半からは、哲学的・神学的人間学、倫理学、解釈学の分野からの研究が集中的に取り組まれてきた。また、そのみならず、認識論、形而上学、美学、文学理論、社会学、政治学、歴史学といった分野からの研究の推奨も積極的になされ、研究分野もさまざまに分かれてきている。

90年代後半の具体的な研究テーマとしては、たとえば1996年の学会では、次のようなテーマが設定されている。「哲学者としてのキルケゴール」、「キルケゴールの人間学」、「キルケゴールの倫理学」、「キルケゴールと政治学」、「キルケゴール：神学と啓示」、「キルケゴール：解釈学と美学」、「キルケゴールとテキスト戦略」、「ジェンダー研究におけるキルケゴール」、「フランスにおけるキルケゴール研究の伝統」、「スラブ圏におけるキルケゴール研究の伝統」、「キルケゴールとデンマークのロマン主義」、「キルケゴールと伝記」など⁵。

またこのほかにも、キルケゴール研究センターが主催する学会やワークショップなどで設定される研究テーマに、次のようなものが見られる。1996年の学会：「キルケゴールと意味することの意味」、1999年ハンガリーでの学会：「キルケゴールとドイツ観念論」、「キルケゴールと実存主義」、「キルケゴールと美学」、2000年のワークショップ：「キルケゴールとシェリング」、2003年の学会：「キルケゴールとグルントヴィー—文化的急進主義の後で」、「キルケゴールとシュライアマハー：主体性と真理」、2005年の学会：「キルケゴールとロイストロップ(Løgstrup)：キリスト教をめぐる論争」、2006-07年の学会：「キルケゴールとヘンリック・イブセン(Henrik Ibsen)」、2007年の学会：「キルケゴールとJ.G. ファイヒテ」など。

このように、研究分野は多岐に亘るわけであるが、上の表に見られるテーマ設定との関連で特徴的なのは、これまで注目されなかったテキストをテーマとして設定することによって、新たな研究分野

が開拓されていることである。たとえば、*Yearbook 1999* では、『文学評論』が研究テーマであるが、これによって、これまではわずかしかなかったキルケゴールの社会批判や社会哲学、政治哲学への関心が喚起され、こういった分野における新たな研究の方向性が示された⁶。また、*SKS* と並行して刊行された注釈書(*SKS K*)には、まだ手付かずだった第一次資料が収録されており、これらを総合的に活用することによる新たな研究も期待されている⁷。

こういった第一次資料の使用は、研究の方法論に密接に関係してくる。これに関連して重要なのは、キルケゴールの日誌・備忘録、およびそれに対応する注釈書が2000年代に入って刊行されたことである。*Yearbook 2001* 年の序文では、この重要性について次のように述べられている。

これらの日誌の刊行は、キルケゴール研究における画期的な節目を刻印する。いまだかつて、キルケゴールの日誌が、その原初の形態において、すなわち、キルケゴール自らが分類して保管し、かつ個別的に取り組んだものの一つとして提示されたことはない。キルケゴールにおける思想形成の継続的な過程が、ようやく日誌やノート、未綴じの書類から追跡できるようになったのである。ここから現れるキルケゴール像は、旧版の *Papirer* から出てくる断片的なキルケゴールとは全く異なっている。今にしてようやく、それぞれの日誌記述をそれぞれの原初のコンテキストにおいて研究することができるようになったのである。⁸

こういった日誌類を、研究にいかに関わり合わせていくかということは、方法論として検討しておくなければならない問題であるが、注釈書への参照も含めてこれらを総合的に用いることが、これからキルケゴール研究を進めていく上で要求される条件となっている。セミナーにおいても、実際にこれらのテキストが研究テーマとして設定されている。その中では、研究者によって無視される傾向にあったこれら膨大なテキスト群を用いることによって、どのような新たな研究成果が得られるのか、そして、これらのテキストがキルケゴールの思想を理解するにあたってどれだけの価値を持つものなのかについて賛否を含めて議論されており、日誌・備忘録の扱い方についても批判的に検討することが求められている⁹。

キルケゴールに関係の深い第一次資料の *SKS K* への収録や、キルケゴールのコンテキストを正確に辿ることができるようになった日誌や備忘録の公開などと並行する形で、2000年代に入ってから、キルケゴールが著作活動を行なった同時代のコンテキストに注目する傾向が顕著になっている。*Yearbook* にも同時代人の第一次資料の翻訳が収録されており¹⁰、同時代における影響関係や、歴史的事実に関わる事柄を解明する研究の方向性も見られるようになってきている。そして2000年代半ばから後

半にかけて、キルケゴールの典拠に関するものや、キルケゴールと同時代人との関係に焦点を合わせた新たな研究シリーズ、*Kierkegaard Research: Sources, Reception and Resources* や、*Danish Golden Age Studies Series* の公刊もはじまっており、歴史的研究の分野におけるこうした動向も明確に確認することができる。これらの研究は、キルケゴールが何について議論しているのか、そのコンテキストを正確に把握することを可能にする。その意味では、こういった歴史的研究の方法や成果も、研究に取り入れていくことが必要となってくる。

以上のように、デンマークにおける研究の大きな流れとして、2000年代からの歴史的研究の動向を確認することができるが、その一方で次のような研究動向も *Yearbook* を通して確認することができる。

まず、キルケゴールと現代思想との接点を探る研究であるが、とくに、脱構築に影響を受けた解釈者らによる『反復』への注目が高まっていることが、*Yearbook 2002* の序文では言及されている。キルケゴールの思想を現代思想との関連で論じる議論は、2001年の研究セミナーの基調講演に、たとえば John D. Caputo が招かれていることから知られるように、主に英語圏において主導的になされていると言ってよいが、こういった動向も重視されていることが *Yearbook* を通して確認することができる。

またこのほかにも、デンマークにおける研究動向として注目すべきと思われるものに、キルケゴールと K.E. Løgstrup(ロイストロプ：1905-1981)との関係を再考する動きがあったことが挙げられる。これは、*Yearbook 2006* で報告されている。その前年 2005 年に、キルケゴールの死後 150 周年と Løgstrup の生誕 100 周年を迎えたことをもって、両者の関係についての研究セミナーが開催された¹¹。Løgstrup は 1968 年の著作『キルケゴールとの対決』¹²で、キルケゴールのキリスト教理解を厳しく批判したデンマークの神学者として知られている¹³。この著作の内容については、本報告書で踏み込むことはできないが、こういった、キルケゴールのキリスト教理解に対する批判的視点が展開されている文献を参照することは、一定の距離からのキルケゴール研究を可能にするものと思われる。方法論的考察を行なう上でも、このデンマークの動向を確認することは重要であろう。

最後に、この十数年ほどの研究動向として特筆すべきは、キルケゴールの学位論文『イロニーの概念』が、新たな関心の下で、改めて注目し直されたことであろう¹⁴。2010 までの前期の *Yearbook* を通して確認できる研究動向の特徴としては、このように、各著作にテーマが絞られて研究がなされるという点に表れているが、それと並行して、それら著作の世界各国における受容史研究も同時になされていることも特徴として挙げなければならない。

以上が、前期の *Yearbook* を通して確認できる研究動向である。2011 年以降の *Yearbook* は、それまでとは異なって、新編集委員によって査読された論文で構成される専門誌にその性格を変えている。先にも少し言及したように、収録されている論文は、それぞれの研究スタイル、すなわち、①キルケ

ゴールにおける、カントやヘーゲル、ルター、エックハルトといった哲学者や神学者の影響関係を扱う典拠的研究、②自己や、倫理的なもの、宗教的なもの、愛といった、キルケゴールのさまざまな概念の分析を行なう研究、③ハイペアやマーテンセンとの関係など、キルケゴールの同時代における歴史的なコンテキストを解明する研究、④キルケゴールがヴィトゲンシュタインやバルト、レヴィナス、ヤスパーズなど、後の世代に与えた影響を扱う受容史研究や、ニーチェやハンナ・アーレントなどとの関係を扱う比較研究に区分されている。その中でも、とくに最近の傾向として、②において、心理学の哲学あるいは現代の哲学的心理学からアプローチする研究や、愛をテーマにした研究などを確認することができる。

4. おわりに

以上が、*Yearbook* を通して確認できるごく大まかな研究動向である。確認できた点をまとめると、まず、①研究テーマとして、これまでの研究史の中であまり注目されてこなかったテキストが選ばれているということが言える。これらのテキストが研究テーマとして設定されることで、新たな研究分野、たとえば政治哲学といった分野からの研究の可能性が示唆されている。また、②文献学的批評を踏まえた全集版 *SKS* とその注釈版 *SKS K* の刊行が終了したことによって、今後この全集版に依拠した研究が必須となっていること、さらに、キルケゴールの思考過程をもととのコンテキストにおいて正確に辿ることができるようになった日誌・備忘録の活用についても、方法論的な議論の対象になっているという点も重要であろう。そして、③キルケゴールの思想を、キルケゴールが生きた時代のコンテキストから解明するという歴史的研究が、2000年代半ば頃からの研究動向としては顕著になっている。このほかにも、④比較研究や受容史研究、またとくにこの数年の動向としては、キルケゴールと愛をテーマにした研究も集中的になされてきている。

最後に、今回の報告書では、仮名性や言語、コミュニケーションの問題を扱った研究の動向については触れることができなかった。しかし、これらをキーワードとする論文が *Yearbook* に収録されていないわけではもちろんない。解釈学や美学などに分類されるこれらの問題を扱う論文の調査は、引き続き *Yearbook* においても行なっていくことにしたい。

-
- ¹ なお、本報告書はコペンハーゲン大学が提供しているオンラインアクセスを通してダウンロードされた研究シリーズ *Kierkegaard Studies Yearbook* に依拠するものである。
- ² *Kierkegaard Studies: Monograph Series 1 Kierkegaard Revisited*, Verlag Walter de Gruyter, 1996, p. VI.
- ³ *Kierkegaard Studies: Yearbook 1996*, Verlag Walter de Gruyter, p. VI. (以下、*Yearbook* 年号とのみ表記する。)
- ⁴ *Ibid.*, p. V.
- ⁵ *Monograph Series 1*, p. VI.
- ⁶ *Yearbook 1999*, p. VI.
- ⁷ *Ibid.*, p. V.
- ⁸ *Yearbook 2001*, p. V.
- ⁹ *Yearbook 2003*, Preface.
- ¹⁰ たとえば、*Yearbook 2003* では、Hans Lassen Martensen による J. L. Heiberg の *Indlednings-Foredrag til det I November 1834 begyndte logisk Cursus* の書評のドイツ語訳、*Yearbook 2004* では J. P. Mynster の論文 “Rationalism, Supernaturalism” と、それに対する H.L. Martensen の応答の英訳、*Yearbook 2006* では、三つの未公開書簡、すなわち、キルケゴールの義理の兄弟にあたる Johan Christian Lund からキルケゴールの兄 Peter Christian Kierkegaard に宛てられた 1857 年 5 月 19 日付の書簡、Regine Schlegel, née Olsen からキルケゴールの遺稿の管理人でもあった甥の Henrik Lund に宛てられた 1866 年 10 月 31 日付の書簡、神学者・著述家・政治家であった Peter Christian Zahle から、彼の学生時代の友人で神学者・著述家であった John Aschlund に宛てられた 1855 年 11 月 19 日付の書簡が収録されている。
- ¹¹ *Yearbook 2006*, Preface.
- ¹² Knud Ejler Løgstrup, *Opgør med Kierkegaard – Efterskrift af Svend Andersen*, Gyldendal, 1994 (1968). なお、本書のタイトル『対決』は *Yearbook 2006* の序文で紹介されている *Confrontation with Kierkegaard* に拠って訳したものである。本書は、序文、第 1 章「史的イエスを考慮しないキリスト教」、第 2 章「犠牲」、第 3 章「無限の運動」、第 4 章「無」、Svend Andersen による「あとがき」で構成される。Andersen によれば、両者が決定的に相違する第一の点は、キリスト教の信仰、すなわち、人間であるナザレ出身のイエスは同時に神である、ということはいかに解釈するかというところにある。人間としてこの世に生きた史的イエスは、キルケゴールの信仰理解には反映されていないということが、Løgstrup のキルケゴール批判の要点になっている(191)。
- ¹³ *Yearbook 2006*, Preface.
- ¹⁴ *Yearbook 2009*, Preface.